

動物性の素材



前々回、籠と漆の回でもう一つ積み残したのがこれ。ミャンマーの馬毛籃胎。下の写真が中身の状態。縦芯は竹だが、黒い部分が馬の毛。漆を塗って細かく絵が描かれているが、とても薄く、押すとペコペコするほどで、質感が厚めのペットボトルのよう。



馬の毛(尻尾やたてがみの部分)の利用は結構一般的で、調べてみると、織物の他にも刷毛やブラシ、裏漉器の網、バイオリンなど楽器の弓、かつては最高級の寝具だったという情報も。籃胎としては2014年にミャンマーの漆工房で作られていたという旅行ブログを見つけた。

他にも動物素材のアイテムがないかと探してみると、小さいものだが馬の毛が編まれているものがあつた。



チリのサンチャゴで買った馬の毛細工のブローチ。



象の尻尾の毛の腕輪と

象の尻尾の毛の指輪である、

というのが、これらを別々に手に入れた時の情報。細いビニールっぽい質感。象の尻尾ってどんなだったっけ。



動物素材を装飾や補助に使ったものならまだありそうだが、編み材としてはさすがにこのあたりでお手上げ。あとは、羊に登場してもらおう。ヒツジばかりでなく、リヤマやアルパカその他諸々、毛の繊維に撚りをかけて糸にしてしまえば、編み物なんでも OK の世界になる。



BNは「かご」のコレクションですからあまり数はない。こんなミニチュアの袋があるのは普通のメリヤス編みではないのが気になったからだ。おっと、これはアクリル毛糸。自然素材ではなかった。

